OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『日本永代蔵』冒頭文考 : 古典駆使と銀徳への〈ひそかな思い〉をめぐって
Author(s)	浜田, 泰彦
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2008, 42, p. 23-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6344
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『日本永代蔵』冒頭文考

―― 古典駆使と銀徳への〈ひそかな思い〉をめぐって ――

浜田泰彦

はじめに、西鶴の古典駆使・矛盾

西鶴の二百五十回忌にあたる昭和十七（一九四二）年七月、織田作之助は『西鶴新論』（修文館）を上梓した。今を遡ること七十年ほど前の長編評論であるが、西鶴の文体に関する多くの卓見を見ることができる。

当該評論でも引用されるが、西鶴（平山藤五）の数少ない伝記資料として知られる伊藤梅宇『見聞談叢』は、その人となりについて、「名跡を手代にゆづりて僧にもならず、世間を自由に暮らし行脚同事にて頭陀をかけ（中略）世間の吉凶、悔吝、患難、予奪の気味をよくあじわひ、人情にさとく生まれつきたるものなり。又老荘ともみへす、別種のいき方とみゆ」（傍点、浜田）[1]と書き残している。織田はこの真偽の明らかでない記述を、西鶴の文学活動の足跡を総括するに、至当な評文ではないか、と述べる。織田によれば、西鶴は仏教思想・老荘・儒学といった体系的な思想や倫理によってからめとることができないほどその表現射程は「面積が広」く、「胃袋が大きかった」[2]と言う。ある特定の思考方法によって眼前の問題が説明できなかったり、解決できないならば、別の思考によって

代えてしまえばよい、というのが織田が繰り返す「大阪人の逞しさ」であり、同時に西鶴の「逞しさ」でもある。[3] とはいえ、あらゆる思考法を借りるということは時に、整然とした思考に一貫されず、矛盾をも招きかねない。だが、織田は「世界観の矛盾など西鶴の与り知らぬところ」なのであり、それどころか、西鶴は「矛盾を克服し」て、「不逞不逞しく構えている」[4]とこれを一蹴する。その思考態度は文体にも反映していると、『西鶴新論』には次の叙述を見ることができる。

それに、彼の想念はだらだらした且つ行儀のよい文章をもってしてはついに支え切れないという、質的に決定的な特徴をもっている。即ち、彼の想念は稲妻のようにぴかっと光った途端に、もう屈折し飛躍するのだ。（中略）彼の想念の歩みは、用心深く摺足で進む歩みではない。身軽く、峯から峯へ飛び歩くのだ。常に連俳的に飛躍して行くのである。野暮に一つの想念に沈潜しているのではない。あっという間に、次の想念に飛び移っているのだ。発句よりも連句に長じている所以だ。しかも、ただでさえ目まぐるしい想念の飛躍がある上に、例の古典駆使がある。普通の行儀のよい文章では、恐らく一をいう間に他の九が逃げてしまうかと思われるくらいである。破格の文章はどうにも致し方なかったのだ。[5]（傍線、浜田。以下、同様。）

この一節は、都の錦や曲亭馬琴が西鶴を無学文盲と痛罵したことに対する擁護でもある。[6] ここで言われるように、西鶴の文章の捉え難さや、破格は連句における「想念の飛躍」に確かに求め得るのかも知れない。

『日本永代蔵』（貞享五・一六八八年正月刊。以下、『永代蔵』と略記。）「初午は乗てくる仕合」（巻一ノ一）冒頭の序文に相当する一節もまた、「想念の飛躍」や矛盾を大いに含んだ箇所である。「死すれば何ぞ金銀瓦石にはおと

れり」と現世での金銀貨幣の価値を相対化したかと思えば、すぐさま「これにましたる宝船の有べきや」と逆に貨幣の能力を誇示する。西鶴の真意は一体どこにあるのか。織田はこの一節に言及して、「この文章は」、「町人の顔を出して茶化しようとする西鶴の趣向によって成立している」と分析し、また、「黄金絶対といい、金銭否定といい、それでもってその思想を云々されるのは、片腹いたいくらい、彼は不逞不逞しく構えているのだ」[7]と分析する。

織田の関心は、西鶴の文章を町人らしさや、大阪人らしさなど西鶴その人に還元することに向けられている。それはそれでよいとして、では『永代蔵』の序文相当部における飛躍や矛盾が、「克服」あるいは「不逞不逞しく」処理されているのだとすれば、具体的にどのような方法で行われているのか、本文にそって見ていくこととしたい。

『永代蔵』には序文が置かれていないが、「初午は乗てくる仕合」（巻一ノ一）の冒頭文が全編の序文に当ると久しく考えられている。改めて、該当箇所を左に掲げる――。

天道言（てんだうものいは）ずして国土に恵みふかし。人は実あつて偽りおほし。其心ンは本虚にして物に応じて跡なし。是、善悪の中に立てすぐなる今の御ン代を、ゆたかにわたるは人の人たるがゆへに常の人にはあらず。一生一大事身を過るの業士農工商の外出家神職にかぎらず、始末大明神の御託宣にまかせ金銀を溜べし。是二親の外に命の親なり。人間長くみれば朝をしらず短くおもへば夕（ゆふべ）におどろく。されば天地は万物の逆旅（げきりよ）、光陰は百代の過客浮世は夢幻といふ。時の間の煙死すれば何ぞ金銀瓦石にはおとれり。黄泉の用には立がたし。然りといへども遺して子孫のためとはなりぬ。

ひそかに思ふに世に有程（あるほど）の願ひ何によらず銀徳にて叶はざる事天（あめ）が下（した）に五つ有。それより外はなかりき。

是にましたる宝船の有べきや。見ぬ嶋の鬼の持し隠れ笠かくれ簑も暴雨（にはかあめ）の役に立ねば、手遠きねがひを捨て近道にそれ〴〵の家職をはげむべし。福徳は其身の堅固に有。朝夕油断する事なかれ。殊更世の仁義を本として神仏（かんぶつ）をまつるべし。是和国の風俗なり。

この一節に続いて、泉州水間寺から銭一貫の借銀をした江戸小網町の舟問屋が、十三年後に利息累積金を併せて八千百九十二貫の大金を返済した有名な本話が展開する。したがって、引用部は本話への導入部にすぎないが、一方で、作品全体のテーマをうたったものであるとする見解は諸先達の一致を見るところである(8)。

かくも短い導入部でありながら、かつて佐藤鶴吉氏が評したように、「この一節は可なり難解とされている(9)」。この僅かな文章をして「難解」たらしめているのは、他の西鶴作品にも見られる省略法ないし圧縮などの独特な修辞法――織田が言うところの「目まぐるしい想念の飛躍」をともなう文章――に起因するところが大と思われる。また、織田の言及にあったように、多くの「古典駆使」がなされていることも、難解たらしめている。ただ、西鶴は古典からの教戒からフレーズを借用しつつも、その範疇では収まりきらないメッセージをも込めたのではあるまいか。以下、順を追って考察する。

二、前半部・銀徳の否定

・「天道言ずして～常の人にはあらず」

「天道言ずして、国土に恵みふかし」の一文は既に、いくつかの典拠が指摘されている。まず、「天何言哉。四時行

焉。百物生焉。天何言哉」（『論語』「陽貨編」）及び、「天ハ地有二大美一而不レ言（モノイハ）四時有二明法一有而不レ議」（『荘子』「知北遊編」）があり、また、王元之「待漏院記」（『古文真宝後集』）の冒頭句「天道不レ言（シラ）ヾ而品物亨（トヲル）リ」（傍点、浜田。以下、同様。）は、多くの注釈書に指摘される典拠である。ただ、これら典拠中には「国土に恵みふかし」に該当する言及は見られない。

この直後に続く一文は「人は」に始められており、西鶴が「天・地・人」の順序に従って言葉を連ねている点は論を俟たない。この秩序においても、また表現上も当該部に最も近接した表現を有するのが、山本土佐掾の浄瑠璃『日本蓬莱山』第三幕の冒頭部で、「かくてその〳〵ち。それ天はものいはずしてこくどをめぐみ。人はべんぜつきよくして心にごれり」[10]とある。同幕中には「それ人としてしのうこうしやうのほかしゆつけしんしよくにかぎらず。（士農工商）（出家神職）世わたるかげう（稼業）何かをろかならん」の一文もあり、『永代蔵』冒頭文との何らかの交渉をうかがわせる。しかしながら、『日本蓬莱山』の成立時期は明らかでなく、その先後関係も問題を含んでいる[11]。いずれにせよ、巻末の祝言（「時津御国静なり」）に呼応して、必ずしも経典の字句からではなく、浄瑠璃正本の文句のような人々の口にのぼりやすいフレーズを西鶴は、この冒頭文にも引いた可能性があるのではなかろうか。

ところで、この「天道」云々の記述について、村田穆氏は「当時の啓蒙書に頻出する」ありふれた内容である[12]、と指摘する。なるほど、「天道」が不変に「言ずして」四季の運行や五穀豊穣等の恵みを与え続けている、との文言は仮名草子にも見られるものである。たとえば、慶安三（一六五〇）年版本以来版を重ね、広く流布した事実が確認されている[13]啓蒙書『心学五倫書』の冒頭を掲げてみよう。

一　天道とは、天地の間の主人なり。形もなきゆへに、目にも見えず。然ども春夏秋冬の、次第のみだれぬごとくに、四時をおこなひ、人間を生ずる事も、花咲実なる事も、五穀を生る事も、是皆天道のわざなり。人の心は形なくして、しかも一身のぬしとなり、爪の先髪筋のはづれまで、此心行わたらずと云事なし。此人の心は、天よりわかれ来て我心と成なり。本は天と一体の物なり。此天地の間に、有とあらゆるものまで、皆天道のうちに、はらまれて有なり。(14)

前半部は、西鶴の言う「天道」の「国土」への「恵み」の内容に一致しうる発想である。一方、傍線を付した後半部では、人の心も「天道」の運行の一部に「はらまれて有」るとも述べられている。

右引用部において「人の心」は「天道」と同様に、「かたちもなく」しかも「天と一体」とある。したがって、人も偽りを言わないものである、と述べる。一方、『永代蔵』冒頭部で人心は、「人は実あつて偽りおほし」と定義づけられ、「天と一体」とはせず、むしろ「天道」との分離を想定した書き方になっている。

西鶴は、「心ンは本虚にして物に応じて跡なし」と、人心を定義する。この一文は諸注釈の指摘通り、程正叔「視箴」（『古文真宝後集』）「心ハ兮本ー虚ニシテ応レ物ニ無シ迹(15)」の冒頭句に拠ってはいる。しかし、語句の典拠を特定するだけではここは充分ではない。というのも、「視箴」は、外部の物のもたらす欲望に目を奪われないよう、心の安定を目指す教訓を有する詩であるからだ。程正叔が目的を果たせば、「久シテ而誠アリ矣」の状態になると述べるのに対し、西鶴は「偽りおほ」い人心をありのまま描き出しているように思われる。

西田耕三氏は、この箇所は何も言わない「天道」と、もの言う人間の性質との対比がはかられており、さらに、「其心ンは〳〵常の人にはあらず」の文章で、「心の特質は隠れることにある。しかも、虚である特質にしたがって、善

悪のどちらの背後にも隠れることができる。人間はこの不安定な状態にいるからこそ、正直にして、しかも豊かに渡世することがむずかしいのである。西鶴はそう言っている[16]」と解釈する。「是善悪の～」は、人間のもの言う特質や、本来虚無であるところの人間の心の特質に触れた前文を受けるものと思われるが、西鶴が「視箴」を引用しつつも、想定した人心のあり方は、「人は虚実の入物」（『新可笑記』序文）、「心は善悪二つの入物」（『懐硯』巻四ノ一）との表現に見られるごとく、自発的に機能するのではなく、たえず外部の「実（善）」や「偽（悪）」いずれにも反応しうる、といったものであろう。そういう意味では、「久シキ誠」を目指した程伊川よりも、王陽明の四句訣（四言教）に「無レ善無レ悪是心之体」（『伝習録』下巻等[17]）とあるところの心の本質により接近しているのかもしれないのである。

さて、「すぐなる今の御ン代をゆたかにわたるは人の人たるがゆへに、常の人にはあらず」の一節は、諸注釈の指摘こそないが恐らく、『老子』冒頭の「道ノ可レキハ道トス非二常ノ道一ニ名ノ可キハ名トス非二常ノ一名一ニ無一名ハ天地ノ之始メ有名ハ萬一物ノ母」という「一一書ノ太旨」（林希逸注[18]）を示す一節をもじった文章になっている。

先述のごとく、西鶴はこの冒頭部で足早に「天・地・人」の順に叙してきた。この内、人の性格はここまで「実あつて偽りおほ」く、「其心ンは本虚にして物に応じて跡なし」と定義してきた。だが、本文の「人の人たる」人とは「常の人にはあらず」、すなわち如上の枠をはみ出すような人物の謂れかとうかがわれる。諸注釈にあるような「人の上の人たる者」（佐藤『評釋[19]』）、あるいは「すぐれた人」（野間『西鶴集[20]』）とは、どのような人物に冠せられる褒詞なのであろうか。

『清水物語』（寛永十五・一六三八年十月刊）に、「人の人たる」人には斯様な条件を必要とするという順礼と翁

との間に交わされた次のような問答が収められている。

順礼曰、「人は皆人にてこそ候へ、人の人たるとは何事に申候や」。
答て曰、「人に人たる人と、人たらぬ人と候故に、人たる人を人と申候。たとへば鷹などの鳥をよく取るは、鷹の鷹たるにて候。鳥をばゑ取らずして鼠などを取らば、鷹の鳶たるにてこそ候へ、鷹といひ難し。猫の鼠をよく取るは、猫の猫たるにて候。もし鼠をばゑ取らずして、魚などを盗み食候はゞ、猫の鼠たるにてこそ候へ。猫とはいひ難し。物毎にその道くあり。人の人たるとは、人の道知りたるを申候なり」[21]。

鷹が鷹らしく、猫が猫らしくそれぞれの道に従って生きるように、人が人らしい行いをすることを「人の人たる」というのだとする翁の返答はまことに簡潔である。ただ、翁は「人は皆人」であっても、「人たる人」と「人たらぬ人」に二分されると引用部に述べている。翁はこの問答の後、『大学』に説かれるところの物事の本末前後をよくわきまえ、人の道を知る者こそが、「人の人たる」人にふさわしい、との見解を明らかにしている。

では、分別をわきまえ、『大学』の掲げる明徳に至った者は、豊かな渡世が約束されるのであろうか。その点、矢野公和氏が世を「ゆたかにわたる」のは、「「常の人」即ち普通の人ではなく悪人ばかりであるというのがこの部分に込められた作者のメッセージであると考え」[22]ることは、当然あり得るだろう。確かに、「人は実あつて偽りおほし」という書き方にそのような意図を覚えないではない。しかし、ここで『老子』の冒頭句「道ノ可キハ道トス非二常ノ道一二」云々をもじったのは、聖人や矢野氏の言う悪人というよりはむしろ、「人ノ人トス可キ非常人」とは、ひとの道をよく弁えた人のごとく金銀の確保にたけた、ごく限られた人だけが豊かに渡世するのだとニュートラルに書

き示したのではあるまいか。

・「一生一大事～子孫のためとはなりぬ」

「常の人」にとって世を「ゆたかにわたる」のが困難であるとするならば、どのように身を処していけばよいのか、その回答が示されるのが、「一生一大事～」以下の文章である。

野間光辰氏は当該部に「すべての人にとっての一生の一大事」[23]と加注しているが、「すべての人」といっても「人たる人」は恐らく世の中を豊かに渡っているのであって、この上蓄財・労働奨励の訓示を与えるまでもあるまい。したがって、ここは谷脇理史氏の指摘通り、「常の人」にとってのそれであると考えるべきであり[24]、吉江久彌氏が「「常の人」を対象として『永代蔵』は書かれたものであることを更に明確にすべきだと考え」[25]られたのに賛同したい。すなわち、「人たる人」が「ゆたかにわたる」のに対して、「常の人」が「身を過る」ことを対比した表現になっている。そのための手段・仕事・職業が以下の、「士農工商」云々である。

退蔵貨幣の戯画的神格化とおぼしき「始末大明神の御託宣」には、ありとある職業従事者が浴すると書く時、そこに「出家神職」も含まれるのは、ある種の皮肉であろうと解釈するむきもある。谷脇氏は、「神仏を祀る僧・神官であればなおさら、倹約の神のおつげに従って」（傍点、谷脇氏）と当該部を訳出し[26]、矢野氏は「本文中に諷される水間寺が利殖に走っているという事実を予め仄めかし」[27]たと読解する。しかしながら、もとより金銀貨幣が善なり真理に導く者や、それを体現する者の手に選ばれて収まるという認識を西鶴は有してはいないのではあるまいか。その意味で、「始末大明神」は、人心の本体のように「実（善）・偽（悪）」にかかわりのない空虚な存在で

ある。げんに『永代蔵』には、「分限は才覚に仕合手伝では成がたし。随分かしこき人の貧なるに愚なる人の富貴此有無の二つは三面の大黒殿のまゝにもならず」（巻三ノ四）ともある。商売神「大黒殿」にすら思い通りにいかないというのである。

そんな金銀は、産みの親を除いては命の親であると書き残したあとで、さりとて人の命ははかなく消えるではないか、「されば……といふ」といかにも故事成句に拠った書き方で綴るのが続く「人間長くみれば」以下の文言である。

当該箇所は、前文より人の寿命の儚さを表現した一文と解釈される。さらに西鶴は、再度『古文真宝後集』より「夫天ー地ハ萬物ノ之逆ー旅ナリ光ー陰ハ百代ノ之過客ナリ而シテ浮ー生ハ若シレ夢」（李太白「春夜宴桃李園序」）[28]と、これまた冒頭句を引用し、貨幣を「命の親」と頼んで執着してみても、所詮は瞬時に消え去る「浮世（生）」に用立てられるにすぎない、と一端金銀の徳の限界をことわっている。

この一連の金銀の徳の否定的見解に続き翻って「然りといへども子孫のためとはなりぬ」とあるのは、矢野氏が述べた[29]ように、確かに付け足り的な印象を拭えない。しかし、この一文は単なる付け足りではあるまい。

金銀が現世においてのみ役立つものにすぎない、との言い種は〈浮世の儚さ〉と共に先行啓蒙書にはありふれた内容である。『実語教』の「富ハ一ー生ノ財　身滅レバ則共ニ滅ス[30]」などはその一例である。恵空はこの字句に「こがねや珠玉のたぐひは、のちの世の重宝とはならず。たゞ一生のあひだのたからもの也」（『実子教童子教諺解』（寛文十・一六七〇年刊）[31]と加注している。だが、ここで西鶴が「然りといへども」以下で翻って金銀の徳を述べたのは、単に付け足りではなく、ありふれた教訓書に対するあらたな提示ないし反論として機能させた一節とは解せないだろうか。

その点、谷脇氏がこの一節の典拠として、衆道教訓書『心友記』（寛永二十・一六四三年刊）をあげられた[32]のは示唆に富むと思われる。

殊に「人世は槿（あさがほ）の露の如し。朝にあつて夕を知らず」とやらん。その上老少不定、眼前なり。今世はほど、刹那の住家はなし。さればこそ李太白も、「天地は万物の逆、光陰は百代の過客、浮世は夢の如し。喜びとなすこと幾ばくや」といひ置けり。然りといへども、皆人、前生の業を知らず。先貪欲を抱きて、富を本とし、身を苦しみ、重罪をなす[33]。

私に傍点を付した箇所に見る通り、『古文真宝』からの引用、共通する語句の多さは一目瞭然である。一方で、「然りといへども」以下が、『心友記』と『永代蔵』では対照の妙をなしている。儚い「浮世」にもかかわらず、「貪欲を抱」く愚を戒めている前者に対し、後者では既存の教戒とは金銭は残して子孫のためにはなると付言することで、貨幣の能力を肯定し、古典の字句の利用のみに終わっていないことを示している。さらに否定し難い金銀の万能の現状を語る西鶴の〈ひそかな思い〉へと接続するのである。

三、後半部・銀徳の「ひそかな」肯定

・「ひそかに思ふに～和国の風俗なり」

「何によらず銀徳にて叶はざる事、天が下に五つ有」の「五」が何を指示するかについては、見解の分れるところである。「生・老・病・死・苦の五つ」とする説[34]とか、「地水火風空の五輪」[35]とする説がある一方で、吉江氏は

特定する必要はない[36]、と述べる。野間氏が、「「銀徳にて叶はざる事、天が下になし」と断言するよりも、一部分保留していった方が現実性があり、説得力を増すからだ[37]」と指摘されたように、「五つ」には特定の抽象的観念が含意されているわけではなく、銀徳の力の限界とその誇示のために「説得力を増す」一手法と解するべきではあるまいか。

というのも、数字の指示対象を特定しない書き方は、『論語』「憲問編」に既出であった。

子曰。賢者ハ辟(サ)ルレ世ヲ。其ノ次ハ辟ルレ地ヲ。其ノ次ハ辟ルレ色ヲ。其ノ次ハ辟ルレ言ヲ。子曰。作(タ)ツ一者七人矣[38]。

世を辟け得た賢者は七人（のみ）であると孔子は言っているが、その固有名は明示されていない。それ故に該当箇所の解釈は多岐にわたるが、朱子集注にその特定は則ち穿鑿であるとする李延平の説が採られている[39]。「世・地・色・言」を辟けることの困難さと、それをなし遂げたが故の偉大さは固有名が特定されずとも、「七人」で示し得る。西鶴はこの賢者と同様の効果を銀徳の力に託したのではあるまいか。

ともあれ、既存の唱導・教訓書にはなかった「命の親」と頼むべき金銀の徳は、儚い浮世でしか役立たなくとも、相対的にはこれに勝る「宝船」はないではないか、と「ひそかに」語った一節の意図は注目されるべきである。先行諸注釈は、「ひそかに思ふに」の箇所から新たに段落を設けた例はないが、『古文真宝』等から故事成句を引用し、その間隙をぬうかのように挿入された銀徳への〈ひそかな思い〉を我々は閑却すべきではない。

宝船に乗って、遥かな鬼ヶ島へ宝探しに漕ぎ出すまでもなく、金銀という「宝船」こそが最上の宝である。遠方を目指さずとも、手近な家職に励むべきである、と〈ひそかな思い〉はさらに展開される。

家職を最優先にすべきとの教戒は、当代にありふれている。寒河正親『子孫鑑』（寛文十三・一六七三年刊）に「それ人は先、其家々の職第一に勤べし。是即庶人の忠也。天の道を心得べし」[40]とあるのはその一例である。これらは、天命に備わった「其家々の職」を互いに励むことで相互扶助の目的を達成する発想であった。鈴木正三は、この相互扶助の思想を「何の事業も皆仏行なり」[41]（『萬民徳用』寛文元・一六六一年刊）とまとめるが、先行唱導書ではその教えとするところに従って、理念化されている。

他方で西鶴は、「士農工商」は各々「始末大明神の御託宣にまかせ」て、「命の親」たる金銀を稼ぐべく家職に励むべきだと書く。つまり、西鶴は「家職」を金銀を稼ぐ手段に限定し、相互扶助の発想はない。これも「ひそかに」語らなければならない所以であっただろう。

ここでの「始末大明神」とは、どのような信仰対象であるのか。本文に従う限り、人々に「金銀を溜めよ」と託宣を下ろす神であって、その趣向は西鶴の新造語であり[42]、退蔵貨幣の諧謔的神格[43]であると考えてよさそうである。ただ、その託宣に「出家神職」すら浴する構図が、本来世間の欲望に手を切ったはずなのに致富に狂奔する姿を諷刺したとする村田氏の解釈[44]は当らないのではないか。金銀はそもそも、特に徳を積んだ者を選ぶわけではない。先に引用したが「三面の大黒殿のまゝにもなら」（巻三ノ四）ないのが、貨幣の流通である。だが、金銀が最上の「宝舟」であるからといって、それを獲得するために公序良俗が撹乱されることはあってはならない。そのことに配慮されたのは次に続く一文ではあるまいか。

西鶴はすぐさま「世の仁義を本として神仏をまつるべし。是和国の風俗なり」と続ける。野間氏は、この「仁義」は儒学用語ではなく、経済生活を営む上での信用を意味すると解説されたが[45]、事実『永代蔵』では、商業上の背

進行為を戒める役割が神仏に課せられたとおぼしき箇所がある。たとえば、「心を畳込古筆屏風」（巻四ノ一）では、対馬行の煙草を製作した大坂の職人は、煙草を水に浸して、重量を嵩上げして販売したところ、買い手の唐人がこれを見抜き突き返された、この「むかし」の話題に続いて、「是を思ふに人をぬく事は跡つゞかず。正直なれば神明も頭に宿り貞廉なれば仏陀も心を照す」と評語が加えられている。

左のごとき詐商の戒めは、鈴木正三『萬民徳用』（前掲）「商人日用」にも次のような言及がある。

> 売買をせん人は、先得利の益（ます）べき心づかひを修行すべし。（中略）正直の人には諸天のめぐみふかく、仏陀神明の加護有て、災難を除き、自然に福（さいはひ）をまし、衆人愛敬、不レ残して万事心に可レ叶。私欲を専として、自他を隔て、人をぬきて、得利を思人には、天道のたゝりありて、禍（わざはひ）をまし、万民のにくみをうけ、衆人愛敬なくして、万事心に可レ叶。(46)

先の煙草職人の例を見ても明らかなように、西鶴も「私欲を専」とする商法に対する倫理認識は正三に共通する。しかしながら、正三は、現世における幸運がもたらす実利は、仏の「福徳」であるとし、「福徳充満の人」は、「大福長者をいやし」むものだとも同じ「商人日用」で述べている。「福徳は其身の堅固に」宿り、銀徳は「天が下」の願いを叶える最上のツールであると「ひそかに思」った西鶴とは態度を異にするのである。

おわりに

『永代蔵』冒頭文後半部で「ひそかに思ふに」と切り出された内容こそが、殆ど際限のない銀徳の力を誇示しよ

うとした西鶴の強いメッセージが込められていた。一方の前半部で、谷脇氏が述べたように『古文真宝』の文句を駆使して、「古文真宝らしく構えた」、もっともらしく勿体ぶって振る舞ったのは[47]、その力を示すために利用され組み込まれたのではあるまいか。織田も「まるで流行歌を口ずさむかのように、教訓的仮名草子常套口調を平気で真似た[48]」と西鶴の修辞について言及している。浮世の儚さ、銀徳の取るに足らぬことは「常套口調」を「真似た」ものであったが、それに「然りといへども」・「ひそかに思ふに」と断った上で、当代の商業資本主義をあるがままに受け止める文言を付け加えた。古典駆使とそれに矛盾するかに思われる文言を加える。冒頭文はそのような構成をとっている。『永代蔵』の方針は、金銀貨幣への〈ひそかな思い〉によって、「金銀有る所にはある物がたり」（巻六ノ五）として決定づけられた。しかし、銀徳の巨大さ故に、その抑止力が課題となる。しかして当箇所の末尾に祀られた神仏は、本章中で倫理を糺す役割に置かれるのである。

注

（1）引用は、亀井伸明校訂『見聞談叢』（一九四〇年七月・岩波書店）による。

（2）ともに、『西鶴新論』（『定本織田作之助全集 第八巻』一九七六年四月・文泉堂書店）「三　大阪人的性格」に見られる表現。

（3）同評論には、「西鶴の大阪的な、胃袋の大きい、逞しい消化力と貪欲さがある」との表現もある。

（4）『西鶴新論』「七　町人物の教訓」

（5）『西鶴新論』「九　西鶴の文章」

（6）都の錦には、「そも〳〵西鶴其身文盲にして」云々（『元禄太平記』巻二ノ一）の文句が、馬琴には、「この人肚裏に一字の文学なしといへども」云々（『燕石雑志』）の文句がある。

（7）『西鶴新論』「七　町人物の教訓」

（8）引用部を「『日本永代蔵』全体の序と見るべき部分」とする谷脇理史氏の頭注（『新編日本古典文学全集68』一九九六年十二月・小学館）等。

（9）佐藤鶴吉『日本永代蔵評釋』（一九三〇年三月・明治書院）

（10）引用は、大阪大学附属図書館赤木文庫蔵本、京都山本九兵衛板による。『日本蓬莱山』を典拠とするについては、野間光辰校注『西鶴集　下』（一九九一年十二月・岩波書店）に指摘があるが、但し、「それ人として～」以下の箇所の引用については論及がない。

（11）東京大学図書館蔵本に「作者　津打治兵衛」とあるが、津打の活躍がみとめられるのは、元禄中頃からであり（信多純一氏による解説『古浄瑠璃集角太夫正本（一）』一九六一年八月・古典文庫所収）、『永代蔵』出版後成立ということになるが、刊記がないため、それ以前成立の可能性もある。

（12）村田穆校注『新潮日本古典集成日本永代蔵』（一九七七年二月・新潮社）

（13）明暦二（一六五六）年、寛文五（一六六五）年版等（石毛忠「校訂注記」参照。『日本思想大系28』（一九七五年九月・岩波書店所収）。

（14）引用は、（13）同書による。

（15）引用は、大阪府立中之島図書館蔵『魁本大字諸儒箋解古文真宝』（延宝七・一六七九年五月刊）による。

（16）西田耕三『主人公の誕生　中世禅から近世小説へ』（二〇〇七年七月・ぺりかん社）第四章「「主人公」の批評」

（17）『伝習録』には、慶安三（一六五〇）年八月、京都風月宗如刊行本がある。引用は、慶安の刊記を有する国立国会図書館蔵本によった。

（18）『老子』本文林希逸注ともに、大阪府立中之島図書館蔵『老子鬳斎口義』（延宝二・一六七四年七月刊）によった。

（19）（9）同書。

（20）野間（10）同書。

（21）引用は、渡辺憲司校注『新日本古典文学大系74』（一九九一年二月・岩波書店）による。

（22）矢野公和「問題の所在」（『虚構としての『日本永代蔵』』二〇〇二年十月・笠間書院所収）

（23）（10）同書。

（24）谷脇理史「『日本永代蔵』巻頭の一節をめぐって」（『西鶴研究序説』一九八一年六月・新典社所収）
（25）吉江久彌「『日本永代蔵』冒頭文の口語私注 ――『永代蔵』の主題にふれて ――」（『近世文芸』一九八五年十一月）
（26）（8）同書。
（27）（22）同書、同論文。
（28）引用は、（15）同書による。
（29）（22）同書、同論文。
（30）引用は、寛永八（一六三一）年刊『実語教童子教』による（酒井憲二編『実語教童子教 ――研究と影印 ――』一九九九年二月・三省堂所収）。
（31）引用は、山田俊雄解題『新日本古典文学大系52』（一九九六年五月・岩波書店）による。
（32）（24）同書、同論文。
（33）引用は、野間光辰校注『日本思想大系60』（一九七六年八月・岩波書店）による。
（34）麻生磯次・冨士昭雄校注・訳『対訳西鶴全集12』（一九七五年四月・明治書院）
（35）佐藤『評釋』（9）同書、大藪虎亮『日本永代蔵新講』（一九三七年三月・白帝社）、暉峻康隆校注『定本西鶴全集第七巻』（一九五〇年十二月・中央公論社）、前田金五郎『新注日本永代蔵』（一九六八年三月・大修館書店）、谷脇『新編全集』（8）同書、浮橋康彦校注『日本永代蔵〈翻刻〉』（一九九五年四月・おうふう）。
（36）（25）同論文。矢野（22）同書、同論文も同様の立場。
（37）（10）同書。
（38）引用は、大阪府立中之島図書館蔵『官板四書大全』（慶安四・一六五一年四月刊、鵜飼石庵点）による。
（39）（38）同書に「李子曰」として「必二其ノ人一ヲ以テ実レバ之ヲ則鑿セリ矣」と引用されている。
（40）引用は、中村幸彦校注『日本思想大系59』（一九七五年十一月・岩波書店）による。
（41）引用は、宮坂宥勝校注『日本古典文学大系83』（一九六四年八月・岩波書店）による。
（42）大藪（35）同書。
（43）浮橋（35）同書、及び谷脇（8）同書。

（44）（12）同書
（45）野間（10）同書
（46）引用は、（41）同書による。
（47）（24）同書、同論文
（48）『西鶴新論』「七　町人物の教訓」

＊『日本永代蔵』の引用は、『近世文学資料類従　西鶴編9』（一九七六年四月・勉誠社）による。なお、適宜本文の句点「○」及び「●」を読点に、漢字を通行の字体に、平仮名の清濁を改めた箇所がある。

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

A Study on the Beginning Part of *Nippon Eitai-Gura*

Yasuhiko HAMADA

Nippon Eitai-Gura (written by Saikaku Ihara,1688) doesn't have a preface; however, the beginning part of "Riding to success on a lucky horse (1-1)" is thought to play the role of its preface.

This beginning part can be divided into two parts by their contents and the styles that the writer used in them. In the first half of Saikaku gave a mediocre lesson on the value of gold by making good use of his rich knowledge of classics, while in the latter half that starts with the sentence "It is thought the secret", Saikaku insisted on the utmost value of money and he did not show the knowledge of classics very much.

In this article I am going to analyze this beginning part by taking its unique structure into consideration.

キーワード：日本永代蔵、序文相当部、ひそかな思い、銀徳、古典駆使